

ニホンアシカ って知っていますか？

ニホンアシカ
学名 *Zalophus japonicus*
英名 Japanese Sea Lion

ニホンアシカは海にすむ哺乳動物です。動物園や水族館でよく見ることができるのがカリフォルニアアシカですが、ニホンアシカは現在「絶滅の一手手前」と言われ、はく製でしか見ることができません。

ニホンアシカは日本にしかいない種で、昔から日本人に親しまれてきました。かつては日本周辺の海にいて、「トド」「ミチ」「アシカ」と呼ばれたり、隠岐の島では「メチ」と呼ばれていました。

『古事記』 (こじき)

奈良時代（今から約1300年前）に書かれた「古事記」にある神話にも登場します。「海幸彦山幸彦」という絵本でも親しまれているお話の中で、わたつみの神の宮殿で豊玉姫は美智（みち＝ニホンアシカ）の皮を敷いて山幸彦をもてなしたと書かれています。



出雲大社の神事

出雲大社の「相嘗の儀」（秋の収穫を祝う神事）は「みちの皮の上に膳を置いて行う」ことになっています。



『出雲国風土記』 (いずものくにふどき)

奈良時代に作られ、出雲地方の地名の由来や、言い伝えなどが書かれている「出雲国風土記」にも、ニホンアシカの群れていた島のことが、「等々嶋（トドシマ）」という地名で登場します。

海驢退散を願うお札

魚をたくさん食べてしまうので漁師さんは、“龍宮尊神”にアシカが退散して、魚がたくさん取れるようお願いしました。島根県の浜田市には江戸時代のお札が残っています。

ニホンアシカのとくちょう

どうやって歩くのかな？
なにを食べるのかな？
ニホンアシカの体を見てみよう！

Q 耳はどんなかたち？

A あたまをうしろから見た写真です。
小さな耳があります。これは、人間の耳たぶにあたる部分です。



↑ニホンアシカのあたま

Q 足はどんなかたち？

A 大きなひねになっています。まえ足とうしろ足でパタンパタンとじょうずに歩きます。



↑ニホンアシカのうしろ足

? アザラシとのちがいは？

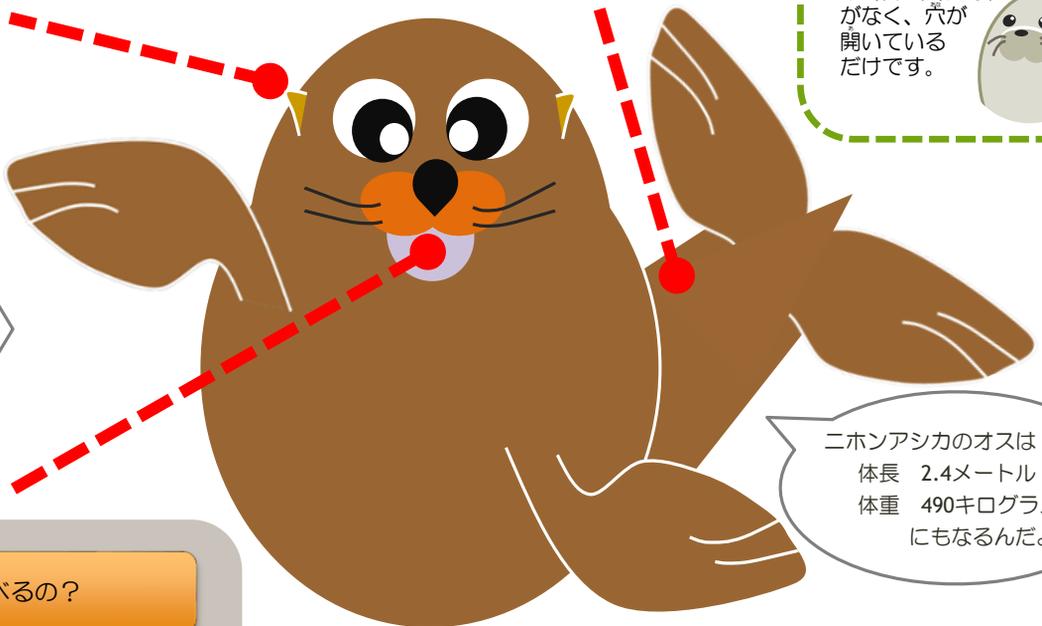
アシカのなかまと、アザラシのなかまでは、体のつくりがちがいです。

アザラシは、まえ足をつかい、体をイモムシのようにして動きます。

また、アザラシの耳には耳介（耳たぶ）がなく、穴が開いているだけです。



こんにちは！
ニホンアシカの「のんちゃん」です！



ニホンアシカのオスは
体長 2.4メートル
体重 490キログラム
にもなるんだよ！

Q なにを食べるの？

A タコやイカ、魚を食べます。するといさばがあります。魚をとる網を食いやぶり、漁師を困らせていました。



↑ニホンアシカの口

むかしは、たくさんのニホンアシカが竹島に来ていました。今では見かけることがなくなり、絶滅したと言われています。生きていたときのようすは、三瓶自然館サヒメルと、しまね海洋館アクアスで、はく製として見ることができます。



↑ニホンアシカのはく製

竹島とニホンアシカ

江戸時代

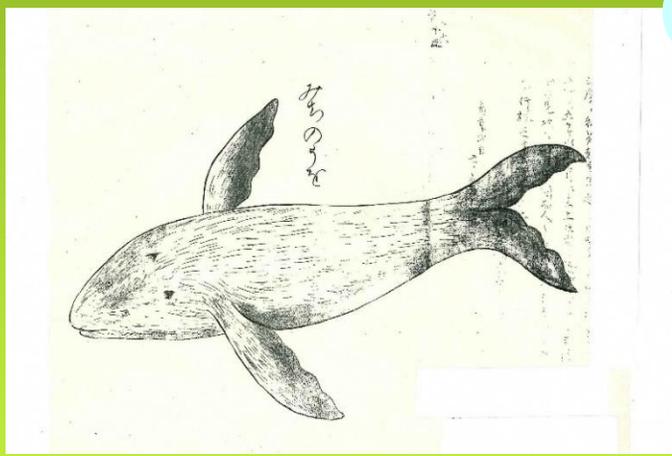
江戸時代のはじめ、鳥取県米子の商人「大谷家（おおやけ）」と「村川家（むらかわけ）」が幕府の許可をもらい、毎年交互に鬱陵島（うつりょうとう）に渡ってアワビやアシカの漁をし、帰る途中に竹島（たけしま）でも漁をしていました。

とれたアワビを干して乾燥させて串にまとめた串アワビや、アシカの油を江戸幕府に献上していました。

江戸時代、菜種や綿花の種油は燃やして明かりにするために貴重なものでした。動物性のアシカの油も明かり等に利用され貴重なものでした。一頭から数斗の量の油がとれたという記録が残っています。（※1斗とは1升瓶10本分の量=18リットルです。）



大谷家にあった古文書に書かれています



（鬱陵島への）道筋に周囲二十丁ほどの草木のない岩小島（＝竹島）がある、この小島でも海鹿（アシカ）の油を少しとる

三代目 九右衛門勝信
 勝信代延宝九年西五月 御遊見様御宿仕其節、竹島之様子就御尋御書差出写
 大猷院様御代五拾年以前、阿部四郎五郎様御取持を以竹島御宿仕、其上様共より
 御目見迄波高 仰付遊有奉存候事
 一 彼島へ年々船渡海鹿魚之油并ニ串鮑所務仕事
 一 竹島へ隣阿部四郎様御宿より百里余可有御座由海上之儀ニ御座候者、佳ニハ知レ
 不申事
 一 竹島之邊拾里余御座候御事
 一 藏有院様御代竹島之邊廿町手御中候小島御座候、爾太無御座候品ニテ御座候
 廿五年以前阿部四郎五郎様御取持を以拜願、則船渡海仕候此小島ニても海鹿魚油
 少所務仕候、右之小島へ隣阿部四郎様御宿より海上六十里余も御座候事
 五月十三日
 右之邊御宿者仕候事

『竹島渡海由来記抜書控』



村川家にあった竹島を描いた古い絵図です。実際に竹島に行つて漁業をした人に聞いて書かれたものです。

300年以上前の地図だけど、現在の地図に負けないくらいよく書かれているね



現在の竹島の地図です。人工衛星から送られた画像をもとに作成されたものです。

竹島とニホンアシカ

明治時代

島根県隠岐の中井養三（なかいようざぶろう）は、明治36年に竹島でのアシカ猟を始めました。多くの人が出漁したことで、アシカが乱獲される心配がでてきました。

そこで竹島のアシカ猟が安定して継続できるように「リャンコ島領土編入並二貸下願」を1904（明治37）年に日本政府に提出しました。

これを受けて日本政府は島根県の意見も聞いて、竹島を島根県に編入することを決定しました。

1905（明治38）年2月22日に、竹島が島根県の隠岐島司（おきとうし）の所管になったことを、告示しました。

島根県は規則を改正して、竹島でのアシカ猟は許可を受けてすること、税金も徴収することにしました。中井養三郎は、同年に「竹島漁猟合資会社」を設立し、県の許可を受けてアシカ猟を開始しました。

中井養三郎



りゃんこ島略図



中井養三郎が出した「りゃんこ島領土編入並二貸下願」（りゃんことう りょうどへんにゆうならびにかしきげねがい）



沖にある岩の上に集まったアシカ（昭和9年撮影）

アシカが上がってくる場所を示しています。

アシカの保護のため、竹島を16の区分に分けて、4分の1を保護場にして人も船も近づかないことにしました。

ニホンアシカ探検隊!



絵はがきのモデルにもなったよ!



（行状本紙）

生于年變つみ島後隠

☆☆やったね☆☆



竹島とニホンアシカ

大正 昭和 時代

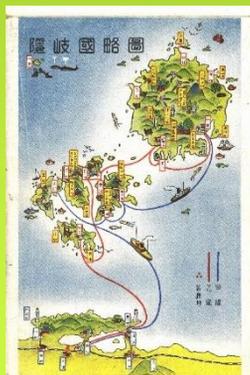
大正末から昭和初期になると、竹島でのアシカ猟は隠岐の久見地区の人々が中心となって行われるようになります。

アシカは、動物園やサーカスへ売られるようになり、隠岐の漁師さんは、竹島の洞窟の前に網を張り、洞窟の奥から追い出す方法でアシカを生け捕りにしました。

また、故八幡昭三さんの証言によると、海で泳いでいるとアシカが来て一緒に泳ぎ、魚を与え続けると、家に帰るとき陸上まで後について来てかわいかったです。



1934（昭和9）年、久見の人たちが猟をしているところ



昭和の初めの隠岐汽船のパンフレット。竹島の近くにアシカが描かれています。



動物園や水族館で人気者だったよ！



今も隠岐の島町久見地区のマンホールのふたには、3頭のニホンアシカがいます。

1954（昭和29）年に、韓国が竹島を不法占拠してから、日本人は竹島に近づくことができなくなりました。そして、当時200～500頭いたとされるアシカは、1975（昭和50）年以降見つかっていません。

ふたたび、竹島でニホンアシカの元気な姿が見られることを願っています。